2026_1112「11 月に咲いたワタの花」日々の理科 4477 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

職場の構内にある花壇で、淡いクリーム色の美しい花を見つけました。ワタ（綿）の花です。ワタはアオイ科ワタ属の植物で、熱帯・亜熱帯を中心に分布し、古くから繊維を採取するために栽培されてきました。ハイビスカスやオクラと同じアオイ科に属し、花の形にも共通点があります。写真の花は開花して間もないようで、５枚の花弁が重なり合い、中心には雄しべと雌しべがのぞいています。周囲には掌状に裂けた大きな葉が広がっています。

ワタの花は一般に朝開き、時間が経過すると花弁が桃色や赤紫色に変化し、やがてしぼみます。この色彩変化にはアントシアニンという色素が関係しています。花は両性花で、自家受粉が可能ですが、蜜を求めて訪れるミツバチなどによって他家受粉も行われます。受精後には緑色の果実が肥大し、成熟すると果皮が裂け、中から白い綿毛が現れます。この綿毛は種子の表皮細胞が細長く伸びたもので、主成分はセルロースです。

興味深いのは、11 月中旬になっても花が咲いていることです。日本では春に種子をまき、夏に開花し、秋に綿を収穫するのが一般的です。しかし、ワタは本来多年生の植物で、気温などの条件がよければ開花を続けます。この株は研究用に栽培されているようで、播種時期や品種の特性が関係しているのかもしれません。晩秋の日差しを浴びて咲く清楚な花から、やがて真っ白な綿が生まれることを思うと、植物の営みの不思議さを感じます。

（2026 年 11 月中旬／お茶の水女子大学構内）

